東條英機と米内光政（下）

判澤　純太*

（平成28年10月31日 受理）

Tojoh and Yonai

Junta HANZAWA*

Many of core historical documents of the Marine war fought between Japan and the United States on 10th October in 1944 are concealed. Nobody of both nation sides still dare not refer to the real phase of its context by respective reasons.

Key words: Yonai, Shigeru Fukudome, Jisaburoh Ozawa, Takeo Kurita

米内光政の部 ― 関係者は誰も本当の事を言わない

1. はじめに ― 軍令部が海軍省に対する優越性を取得

島田繁太郎海軍大将が１９４１年１０月１８日，東條内閣の発足に伴って海相に就いた．その前職は，３５年から２年間を軍令部次長（岡田，広田，林，第１次近衛内閣）職に就いていた．島田の海相就任の約半年前に永野修身海軍大将が４月９日，伏見宮と交代に軍令部総長に就任した．永野は「３国同盟」に徹底反対の吉田善吾海相と，阿部，米内，第１次近衛内閣迄はうまく協調して来た．

吉田善吾大将は海兵第３２期出身で，山本五十六，島田繁太郎の３人は同期である．３人を繋ぐ絆の質は，吉田の姿勢に良く代表されていた．永野修身は吉田善吾より海軍兵学校が４期上級であった．このことによってか，東條内閣で，「軍令部」が「海軍省」に対して相対的に優位にいた組織的特性が見える．海軍省の政策は海軍省ビルの１～２階（海軍省）でなく，３階（軍令部）で決まってしまう傾向が強まったと見られていたといえる．

永野修身は日米開戦時に軍令部総長に任じた．永野はどのような人物像だったろうか？３６年８月の「海軍首脳会議」で，超ドレッドノート級戦艦建艦方針を決定した広田内閣海相が，永野修身であった．日本は３７年１月から所謂「海軍無条約時代」に突入した．

この時代用の指針を決定したのが，つまり永野であった．永野は林内閣で海相を米内光政と代って，連合艦隊司令長官へ転出した．

４１年初頭「第５次海軍軍備充実計画案」（通称，「⑤計画」）は，戦艦５を含む，艦艇１５９（６５万 t），航空兵力１６０隊整備を謳った．これは，３６年８月の，「永野

* 国際関係論（環境科学科）教授

決定」に基づいていた．永野修身は，加藤友三郎内閣（２２年６月１２日成立）が「ワシントン海軍条約」に沿って行った「海軍軍縮」を，やむなく「海軍無条約時代」の岐路に，撤廃させる役職に放り込まれたのである．

永野は「３国同盟」締結に反対であった．南部仏印進駐（４１年７月２８日）については判断がつきかねるし，参謀本部課長クラスの意見を徴して石川信吾大佐の判断を採用した，と永野は後に本音で釈明した．しかし，陸軍側に言わせれば，その方針転換は海軍が陸軍を引っ張り込んだとみなせるのであった．確かに，陸軍のこの主張の方が当を得ている．ただ海軍は，陸軍に無謀な「北進」を止めさせる方便にそれを主張していたのだった．

真珠湾攻撃「案」に，永野は煮え切らない態度を取った．「山本長官がそれほど自信があるというならば…・・」と，永野は他人任せにしてしまっていた．

「軍令部の優越」という新しい関係に，法的な支えも存在した．３３年４月２８日「海軍軍機５１５号」（軍令部令改正）が，大角海相，井上成美（大佐）海軍省軍務局第１課長（「条約派」）と，もう片方は「艦隊派」代表である高橋三吉軍令部次長の間で，スッタモンダした挙げ句の事であったが，「軍令部」の，「海軍省」に対する法的優位が，これで規定されたのだった．

翌３４年５月３０日，「連合艦隊」（General Fleet，「ＧＦ」と略称）が常設化された．ちなみにこれを歴史に先例掘り出して準えてみると，「ＧＦ」が，あたかも帝国陸軍の「関東軍」，に匹敵するポジションを形成して行った，という風に見なせる．

歴史上，日・英米戦争はこうして，日本側は，帝国陸軍が「陸軍省」，「参謀本部」の２つ（ただし関東軍は日華事変まで），帝国海軍が「海軍省」，「軍令部」，「ＧＦ」の３つの作戦用頭脳を有した状態で，かつそれぞれの頭が互いに反発しながら戦った，とみなせるというのが実相である．尚，それより大きな括りにするならば，「陸主海従」か「海主陸従」かを巡る，もっと大きい陸・海軍の反発関係が存在した．

４１年６月，「独・ソ開戦」が始まると，翌７月，アメリカ政府が日本政府に対する在米資産凍結を発表し，イギリス，蘭印もすぐその措置に追随した．８月，それらの国々は日本政府に対して，対日航空機用ガソリン禁輸政策を追加実施した．

永野軍令部総長はこの時，「寧ろこの際打って出るべし」と勇ましく吼えて見せたがそれには虚勢が半分以上混じっていただろう．永野の心底を離れぬ最大関心事は，専ら海軍「特別軍事予算」配分比であったのだから．ちなみに，４０年度では，海軍予算は対陸軍予算（１５億円）３６％に過ぎなかった．ここで遥かにワシントン会議の時代を想起すれば，２１年度海軍決算（４億８，４００万円）は，陸軍の約２倍に達していた．

４１年度の決算を確かめると，それは，海軍は「⑤計画」を要求していたが，１５億円づつ「陸・海均分」になっていた．ところで，その他，１１４億円の「軍事用第２特別会計」が認められていたが，問題はその「配分比」については密室（非公開）だった事にある．だからこそ海軍は，「第２特別会計」[1]の配分比にモロに繋がると警戒しなければならなかった．だが，永野はその弱気の本音を公言できる筈もなかった．

また，追跡調査によると，日本政府の同項目の軍事予算は，４２年度いっぱいでほぼ底を尽きた．これはとりもなおさず，日本の当時の継戦能力の客観的限界（身の程）であった．

４１年１０月２３日～３０日迄（２６日を除く）の７日間に，「大本営・政府連絡会議」

が開催された．同会議において，日本政府が対米開戦に踏み切るかどうか，が最高会議として最終決断されたのであった．

先に，４１年６月，「海軍第１委員会」（正式名称は海軍国防委員会・第１委員会）なる組織が，「現情勢下において帝国海軍の執るべき態度」なる意見広告を発表した．同組織は海軍省と軍令部の横断的組織であって，課長クラスが自主的に結成した．海軍省からは，軍務局第１課長高田利種大佐，第２課長石川信吾大佐，軍令部から作戦課長・富岡定俊大佐，大野竹二大佐らが同組織の結成に参加した．この「第１委員会」が提起した強硬論が，永野総長，伊藤整一次長（４１年９月１日に任），福留繁第１部長（４１年４月１０日に任）で構成する「軍令部」を激しく誘導した，といっても過言ではない．永野が揺さぶられたのである．

東條内閣の発足で直ちに開かれた「大本営・政府連絡会議」では，対米開戦の是非に関る結論は，次の２案に分れた．

第１案は，参謀本部が提議した案で，武力発動の時期を１２月初旬と定める．

第２案は，賀屋興宜蔵相と東郷茂徳外相が提議した案で，対米交渉は１２月１日午前零時迄努力して詰める．もし外交の方が成功すれば，武力発動を中止する．

戦後に毀誉褒貶というより，偏に批判糾弾される悪役に明らかに成り下がってしまった東條首相であるが，当時はその立場を，次の様な言葉に凝縮した．「海軍さんが反対すりゃ（開戦なんて）できません」．東條首相は，海軍がなんとか対米開戦を停止してくれないかと，本音は海軍の態度に最後の講和の望みを繋いでいた．

第３次近衛内閣は，ルーズヴェルト米大統領が仕掛けた「１４特許銀行シリーズ」金融集中攻撃を浴びて，その凄まじい，日本にとって初経験の金融苦境に陥って倒壊した．金融八方塞（ふさがり）になったのだからこそ，次に出馬する東條首相は，平和回復のチャンスを求めて，「親米派」の賀屋興宜を対米金融「講和交渉」準備中のアピール用に，蔵相に抜擢して入閣させて見た．

果して，対英・米戦争開戦「後」に，東條内閣は，「軍令」から排除されて制限された自分の職責内で，その国際戦略を，「アングロ連合」の「１４特許銀行シリーズ」を打破する目的に向かって只管突き進まなければ生き残れない，と突き進むのであった．英領ビルマ，米領フィリピンの２地域に，国立銀行を設立することが，東條首相にとってまず優先し，ひいてはその国際金融政策の延長上に，東條首相は，自由インド仮政府国立銀行設立をも画策した．

「３国同盟」という国際枠組みを用いて，ビルマ，フィリピン，インドの欧米「アングロ連合」の植民地に完全国家独立を複数国家の承認（ヨーロッパの複数大国を含まなければならない）を取り付ける事に，東條首相は，今次の日本の戦争目的を絞ったのだった．

ところで，東條首相を首相就任と同時に陸軍大将に格上げしたのは，杉山参謀総長（山田乙三教育総監）である．だから東條首相は，ギリギリまで参謀本部の用兵指導権に，杉山参謀総長に優越しなかった．広く見れば，東條首相には，日本産業界に対して戦争指導（広義国防）を徹底させる政治力の備えさえもなかった．この様に劣弱な，制限された東條首相の首相権力は，更に海軍との関係では，海軍は天皇に「統帥権」によって直属して

いたから，海軍に対するいかなる統制権も持てなかった．

一方帝国海軍では，岡田内閣以来の内訌を克服し，ちょうど「艦隊派」がトップ層から一掃されていた．だから東條首相にしてみれば，「海軍さんが反対すりゃ（対米開戦なんて）出来ませんヨ」と，他人任せの発言が口を突いて出たのだった．

「２・２６事件」で斉藤実（虐殺），岡田啓介（未遂）の命を奪った陸軍の佐官級が，海軍から次に日本政府を再び代表するであろうと見なされる米内・元総理を，３８年夏から３９年８月迄続いた日独伊「３国同盟締結交渉」を阻害した張本人である，と見なして殺害する計画を企てていた．米内光政は，自分の内閣が潰される（４０年７月２２日）と，前官待遇を賜って重臣の１人になって，政治的影響力が失われていた．

東條首相から「下駄を預けられ」た形の海軍軍令部は，永野「総長」，伊藤整一「次長」，福留繁「部長」の３人体制になった．しかしその内実は，「軍令部」は作戦最終決断を，「連合艦隊（ＧＦ）」に丸投げにしていた．

山本五十六ＧＦ司令長官は，東條首相あるいは杉山参謀長から「勝てるか？」と問われると，「向後２年未満なら，西太平洋で大いに暴れて見せられます」と返答した．これは有名な山本の最終回答である．

山本提督が２年未満に作戦有効期限を切ったのは，海軍燃料の残量を山本が勘案したからであった．特別軍事予算の内容を後から点検し直すと，なる程山本の正確な見通し通りにそれは４２年度を以ってちょうど尽きている．

ここで特に注目を要する点だが，山本五十六は米国本土攻撃を１度も約束しなかった．山本は東部太平洋への進出する意図すらなかった．そして日米海戦に臨んで，山本五十六は２つ次の様な要求を統帥部に出したが，しかし２つの条件とも結果的にそれは破られたのであった．だから，日本はアメリカとの戦争に負けたのである．その山本の要求は，

（１）連合艦隊は保有燃料の観点から，２年未満しか稼動しない．
（２）海戦の勝利を欲するなら，「集中索敵」しかやらない．「分散索敵」は採らない．

島田海相は御前会議に度々出席したが，その席上で，遂に３６年「帝国国防方針」との整合性の話を持ち出さなかった．そこには，「日本は対１国以外の戦争はしない」という国策方針が明瞭に定められていたから，そもそも，対英・米「開戦」は，「帝国国防方針」に違反するのであった．島田海相の「沈黙」と，永野軍令部総長の対ＧＦ「妥協」が，帝国海軍に対英・米「開戦」に踏み切らせた，といえる．

真珠湾への攻撃に関して，山本五十六は，新進の東大の国際戦時法学者・立作太郎教授の研究室に事前に足繁く通った．１７５７年に発生した英・仏「プラッシー戦争」の研究成果を，洋行帰りの立教授から直接学ぶ事が山本の目的だった．日米を本国同士の戦争に到らせない局地戦争は，いかに戦端の火蓋を切ったら良いか？の策を山本は立に求めた．

「プラッシー戦争」の当時の英軍３，０００人は，インド・ベンガル地方で，フランス軍＋ベンガル太守シラージュ軍７０，０００人を１撃で，「１日で撃破」した．ところが山本が研究していたのは，いかにして英軍が勝ったかではなく，その戦後に，なぜ英仏が本国戦争をしなかったか？という国際法の事例研究の方であった．

山本の結論は，出先植民地（当時ハワイ諸島はアメリカの植民地（territories）に限る

紛争（dispute）であるならば，「ヨーロッパ国際法」の規制が働き，本国間の戦争に発展せず，本国（宗主国）同士の外交関係は切断されない，という見解であった．かくして，山本の真珠湾攻撃構想が生まれた．

2. ニミッツの抜擢

１９３５年に「ロンドン海軍軍縮条約」（補助艦の制限）が失効すると，前３４年に日本は，３６年末を以って「ワシントン海軍軍縮条約」（主力艦の制限）を破棄すると宣言したから，日米間は，太平洋を挟み sea power（海軍力）について無条約状態になった．

フランクリン・Ｄ・ルーズヴェルト大統領は，ホワイトハウスで，海軍上級指揮官を自らの手で選ぶ事を習慣にしていた．その脳裏に，５４才のニミッツ・米海軍航海局長（後の人事局）がふと浮かび上がった（同人は３９年８月に着任）．尚，ニミッツの前職は合衆国艦隊司令部副参謀長である．

航海局長のポストは，職務上海軍士官の募集，訓練，昇進選考，勤務評価，あるいは処分に当たり海軍幹部士官との知己が広く，それぞれの人物の資質特性を良く掴んでいた．その点こそ，一族が家庭では日常にドイツ語を話して暮らしている，実直なそのドイツ系アメリカ人を，ルーズヴェルトが，米太平洋艦隊司令官に抜擢した理由であった．なお，付言したい１つのエピソードがある．

ルーズヴェルトは，ハズバンド・キンメルに先んじて，実はニミッツに声掛けしていたが，ニミッツ自身の後付け釈明だが，自分がドイツ系である事を慮って，ニミッツは太平洋艦隊司令長官の座を慎重に先輩キンメルに譲った．颯爽とハワイへ赴任し異例の３１人抜き抜擢にまんざらでもないキンメル大将は，山本五十六の「真珠湾攻撃」に巻き込まれる苛酷な運命を予見できなかった．

しかもキンメルは，自分が最も信頼する部下たちが自分を疎外して情報を自分に届けていなかった事実を，突然日本軍による攻撃を受けた後に，呆然と後から知った．それからキンメル一族には，職務怠慢の汚名を晴らす日が遂に来る迄，孤独で辛い裁判闘争の日々を繰り返さねばならなかった．遂に訪れた名誉回復のその日に，すべては最上層部の謀り事だった事がいよいよ明らかにされた．

さて，既に３４年に米国議会は，軍縮条約の限度いっぱい艦艇を拡充する造艦計画を採択した上に３８年にも追加議案を通し，太平洋と大西洋の両洋艦隊を設置して１０億ドルの予算を当てる事を決定した．

４０年になるや，アメリカは艦艇を本土の西海岸からハワイ真珠湾へ移動させた．この行動で，ヨーロッパ戦局で対独戦争で多忙になったイギリスに代って，アメリカは空っぽになった英シンガポール軍港を進んで積極的にバックアップする事で，東アジア・南アジアの英・蘭・仏植民地を保衛しようと図った．アメリカには，アメリカの最大植民地であるフィリピン諸島等を含め，「アングロ連合」が地球規模で現在経営している植民地利権を手放す気持ちは毛頭無い．

４１年２月，ハズバンド・Ｅ・キンメル少将が大将へスキップ昇進し合衆国艦隊司令長官 Commander in Chief, U. S.（略称 CinCUS）兼太平洋艦隊司令長官 Commander in Chief, Pacific Fleet（略称 CinCPac）に就任した．この CinCUS という名称は，米大西洋

艦隊，米アジア艦隊（マニラに駐留していた小型海上船隊），米太平洋艦隊の各司令長官が持ち回りで使用する事になっている．

誰がキンメルを陥れた（罠に嵌めた）真犯人だったか？私の推察では，それはノックス海軍長官ではない．彼は脇役だったかも知れない．大統領と，当時大統領にもっとも近かった１人である，マーシャル参謀長官が最も怪しい容疑者である．４１年１２月１６日，ニミッツは海軍長官ノックスから，「太平洋艦隊司令長官」就任の命令通知を受け取る．

3. 「ミッドウェー海戦」の勝敗と南雲機動部隊の敗因

南雲忠一中将が率いる，機動部隊が主軸の帝国海軍は，「ミッドウェー作戦」に空母戦艦１１，その他を含めて，空前の総艦艇３５３隻の体制で出撃した．これに対比するに，米海軍の戦力は，空母３，戦艦その他含めて総艦艇５７隻で，明らかに激しい劣勢である．日本海軍の圧勝を疑う者は誰もいない．ところが，帝国海軍は出動空母４隻の総てを喪失した（アメリカの損失空母は「ヨークタウン」１隻のみ）．

「ミッドウェー作戦」（現地時間４２年６月４日，日本時間６月５日）について以前から巷で噂が広く知れ渡っていた．連合艦隊根拠地がある瀬戸内呉柱島泊地近辺では，床屋でも海兵客に気軽に「今度はミッドウェーをやるんですってねェ」と内情通を自慢する顔で尋ねたりもし，下級海兵には親族宛ての手紙に，「６月下旬以後は宛先をミッドウェーにして下さい」と認めた者もいた．軍上層部でも，８月１日付けで，第２連合特別陸戦隊の指揮官大田実海軍大佐がミッドウェー海軍基地の指揮官になる事を予定していた始末であった．考えられない程弛緩し切っている雰囲気が漂っていた証左であろう．

反面，アメリカ側にもややこれに似た緩んだ状況があった．４２年６月７日付けの『シカゴ・トリビューン』紙のスクープは，事前に暗号解読に米海軍（ハワイ真珠湾にアメリカ太平洋艦隊司令本部を置き，ニミッツ大将が総司令官に任）が成功し，日本海軍の作戦内容が逐一知れ渡っていると暴露した．直ぐに記事は削除されたが，アメリカ側にも若干の油断の対応があった．

さて，山本ＧＦ長官は，「真珠湾奇襲大勝利」後から約半年間を，瀬戸内海柱島泊地に旗艦戦艦「長門」を根城にして逼塞していた．山本は休眠しているかの暮らしぶりであった．沈思黙考状態が続き，さもなくば長官は，時折好きな将棋を気晴らしに指すだけであった．その姿勢の理由がなぜだったかを後から忖度すると，山本長官は，（１）相変わらず燃料の目減り具合を只管気にしていた．（２）今後戦うなら，「集合索敵」が可能な条件を，今度こそ慎重に探っていたのであったろう．

そんな山本の悠然たる有り様に陸軍が不満を抱く．そして山本に陰に陽にクレームを寄せた．山本は重い腰を上げなければならなくなった．

しかし，他方帝国海軍はそれなりに，南雲中将が中心になって大いに活躍していた．

海軍「インド洋作戦」（４２年２月２５日～４２年４月１２日）で，近藤信竹海軍中将が率いる「南方部隊」が，インド洋を暴れまくっていた．機動部隊（南雲忠一海軍中将指揮）が４２年４月にセイロン島コロンボを空襲し，ソマービル英海軍大将が指揮する英国東方艦隊をマルダイブ諸島（セイロン島南西６００海里）へ追い散らし，「マレー部隊」（小沢治三郎海軍）は，ベンガル湾北部を制圧し，英領インドと英領ビルマ間に楔を打ち

込み，遮断する事に成功した．帝国海軍は，イギリス東方艦隊の空母「ハーミス」，重巡「ドーセットシャー」と「コンウォール」を撃沈し自分は無傷であった．帝国海軍は向かう所敵無しの存在だと謳われもした．

山本は気が進まない腰を遂に上げた．その理由は，（１）真珠湾で南雲中将が米空母４隻を討ち漏らしたことに，改めて批判が持ち上がり，それは南雲に名誉回復の機会を与えよ，との婉曲で意地悪い突き上げの形を取った．（２）「珊瑚海海戦」（Ｍｏ作戦）に盟友・井上成美海軍中将（内南洋部隊指揮官：南洋方面隊〈塚原二四三中将〉に帰属）が，これにも５月７日に怯だな撤退行動を取った，と屁理屈の非難が浴びせられた．たとえば「井上は次官の望み無し，大将もダメ，兵学校長か鎮長官がせいぜい」と，後者には旧「艦隊派」の執拗な妬みが込められていたとも私は推測する．

だが，客観的に見ると，その本心を隠してはいたが陸軍は，日対米・英戦で，海軍ばかり手柄を一人占めしていると妬んで，陸軍（一木支隊）によるミッドウェー島占拠という栄えある陸海共同作戦の成功を帝国陸軍用に海軍が演出して欲しい，と海軍側に申し込んだのである．陸軍は，ドゥーリットルＢ－２５飛行隊１６機が空母ホーネットから発進し４２年４月１８日に帝都上空で申し訳程度の初サーカス爆撃を決行したがそれを撃ち落とせず，その面子回復も貪欲に欲していた．

さて，米海軍は４２年５月から，珊瑚・ソロモン海域のポート・モレスビー（オーストラリアの対岸，ニューギニア島東部）と，豪州北部に約３００機の航空機を本格的に持ち込み，ガダルカナル島の占領，米領フィリピン奪回へ向ける一大拠点作りに取り組み始めた．だが，その地は，そもそも日本陸軍軍人達には見当もつかない海域であった（「珊瑚海とは，ソロモン海とは何処じゃ？」とは，陸軍将軍達の典型的反応である）．

帝国海軍が出動した「珊瑚海海戦」（４２年５月３日～８日）は，ポート・モレスビー方面の連合国軍（ＡＢＤＡＮ〈米英蘭豪・ニュージーランド〉）航空機を撃滅し，米・豪を分断しようと狙った作戦である．

内南洋部隊「第４艦隊」（井上成美海軍中将指揮）は，同海戦後に，小型空母「翔鳳」を喪失し，大型空母「翔鶴」を損傷した．一方米軍はフレッチャー少将が率いる第１７任務部隊が大型空母「レキシントン」を喪失し，大型空母「ヨークタウン」を損傷した．航空機分野は，日本側の喪失航空機が１００機，米側は７０機であった．また戦死者数は日本側約９００人，アメリカ側約５４０人．戦後の日米の共通戦史観は，帝国海軍はこの海戦に「戦術的」に勝利し，一方アメリカは，「戦略的」に勝利した，と総括している．

ところで，帝国海軍（井上）の戦法は，それまで山本五十六が要求する戦法（「ヒット＆ラン」）を忠実になぞっていた．それに付言すると，先の南雲中将の真珠湾攻撃における戦法も，井上成美の戦法と同様に，山本五十六流の戦法に忠実に適う．

アメリカが「戦略的に勝利した」と分析した意味は，ニューギニア東部，珊瑚海，ソロモン海を有する敵の帝国海軍の「（１点）集中防禦対応最高値（MAX power index）」を正確に計測し，何よりニューギニア島「ポート・モレスビー」基地を維持し，それによって，直後に新取得することになる「ガダルカナル」基地（米がヘンダーソン飛行場を建設）を，米海軍が死守する事に繋げられたからであった．

同作戦海域の鳥瞰図は，日米両海軍の珊瑚・ソロモン海戦略配置が顕らかに非対称であった，と分かる．すなわち，日本側は，「広域海防圏」を保持しなければならず，それに

比べて「アングロ連合軍」は，日本のその長過ぎる防衛ラインの内側に，１個所突破口を見つけて，そこを突けば，それで足りた．そして，日本軍の，件の「集中防禦最高値」を，米軍側は「珊瑚海海戦」実戦で肌で知った．南洋海域で，山本五十六長官は，自分が嫌がる「分散索敵」を強いられたが，他方，アングロ連合軍の方は，「集中索敵」を随意に仕掛けられたのである．

ところで，「ミッドウェー作戦」（現地時間４２年６月４日，日本時間６月５日）に，日本の大型空母２隻は，「珊瑚海作戦」用に割いたから，不参加である．

４２年４月１６日，軍令部から「アリューシャン作戦」（米領アッツ，キスカ島上陸を目指す）とミッドウェー作戦を合一する案が奏上され，ご裁可を得られた．

陸軍は，海軍の尻をせわしなく叩き，海軍側に哨戒線（国防圏）拡大を迫った．だからこそ，ミッドウェー作戦を後で検証すれば，ＧＦは潜水艦部隊の哨戒線配置が遅れ，「インド洋作戦」から戻ったばかりの南雲「機動部隊」を碌に休息もさせず，事前訓練も無しに直ちにミッドウェー戦域に注ぎ込んでしまった，と我々は発見することになる．こうして，日米の主戦場は，太平洋の遠く離れた２焦点（１．ミッドウェー，２．ソロモン海）に更に「分散」した．今こそ，「持久戦」が必要で，「分散」は愚策だ，と山本五十六ならば苦しんでいた筈なのに，である．

日米海戦に関しては，その前半部で，米国側に特殊事情があったことも視野に入れておかなければならない．「ＳＥＡＣ」軍（South East Asian Command：米英蘭豪及びニュージーランド，で構成する，東南アジア欧米植民地防衛を担う，総兵力３５０万人）の総大将にマウントバッテン英海軍中将（ＳＥＡＣ軍最高司令官）が４３年に正式就任し，「アングロ連合軍」（英米）が，太平洋の海戦の場合にも「戦闘序列」として，作戦最高指揮権を，ルイス・マウントバッテン卿に委ねなければならず，その作戦は原則上，英艦船が，「英海軍の名誉の為」に１隻以上含まれていなければならなかった．この様な特殊事情があってこそ，太平洋戦争（日本側の呼称では「大東亜戦争」）の前半部は，太平洋海域にも英海軍主体というイギリスの世界政策が反映されていたから，米海軍は消極姿勢に終始したのであった．

アメリカが，その無尽蔵の産業力にモノをいわせて日本の２，３倍の速度で空母を完成させる後半部時代が，１９４３年の初頃から到来する直前に，「ミッドウェー海戦」と，１次～３次「ソロモン海海戦」が戦われた．

ところで，海戦の必勝策は必ずしも総勢力（総排水量）では無いのである．勝利するには，各戦局面が，必ず敵に，戦力的相対優位を確保し続けることが必勝法である．

山本五十六が，頼りの命綱と見込んでいた仙人・黒岩亀人ＧＦ先任参謀（大佐，海兵第４４期）が，寝食を忘れて苦悩しながら立案したミッドウェー海戦の「机上作戦」を，今，我々が検証しよう．すると見えて来るのは，「各戦局面相対優位」の鉄則がそこに貫かれている，さすがの優秀答案である．黒岩案を詳細に検証すると，同作戦は，（１）～（４）の，４段階で構成されていた，と分かる．

（１）南雲「第１機動部隊」（大型空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」を擁する）が，ミッドウェー沖に米大型空母（スプルーアンス少将率いる第１６機動部隊「エンタープライズ」「ホーネット」と，フレッチャー少将率いる第１７機動部隊「ヨークタウン」

が出動）群を「誘い出す」.

ミッドウェー（直径１１㎞の珊瑚礁，サンド島，イースター島で構成）は，ハワイと東京を結ぶ中間点からやや北東の方角にある面積５平方ｋｍのチッポケな２島で，７５０人規模の米守備兵が防衛していた．日本陸軍は，同島を含む大日本帝国「絶対国防圏」の形成を，世界向けに大いにアピールしようと企画した．しかし，山本ＧＦ司令官の考え方は，陸軍のそれとは真逆だった．「珊瑚海海戦」の接戦の教訓は，日米の海軍力が５分５分である事を示したから，海軍が連合艦隊を「分散使用」させるならば，南洋海域の形勢が，日本側不利に大逆転するだろう，と山本は憂慮した.

黒岩参謀のシナリオと突き合わせれば，現実に起こったミッドウェー海戦を黒岩は，半分だけ予言適中出来ていた.

（１）米側は３大型空母群を出動させ，日本側の４空母群と絵に描いたような艦隊決戦を行った．黒岩の予測が見事に外れた面は，アメリカ側は「誘い出され」なかった．「誘いを受け」た形を巧みに演出したが，逆に待ち伏せ攻撃を仕掛けた.
（２）北方アリューシャン方面から第２機動部隊（角田覚治中将指揮）が襲い掛かる.
（３）西方から第２艦隊（近藤信竹中将指揮），栗田部隊（第７戦隊）が３の矢，４の矢を放つ.
（４）最後に，山本ＧＦ長官本人が指揮を執る主力艦隊が後詰めに控える，であった.

この様な戦略プランは，「机上」の摸擬戦でならば，日本が負ける筈は無かった．だが，実際の結果は，連合艦隊は４空母の全てと，艦載機３２０機，そのベテラン搭乗員５００人を失い，戦死者３，６００人を出す惨敗を喫したのであった.

結論は，日米「索敵」方法の違いが勝敗の差を分けた．[2]山本五十六は，太平洋上においても赫赫たる戦果を欲しがった陸軍の強請（ゆすり）に屈したといえる．ミッドウェー作戦に，陸軍兵（一木支隊の３，０００人）を引き連れ，陸軍兵の為にミッドウェー島を占領するという，やっかいな付加「条件」が山本に課されていた．これが，南雲第１機動部隊の位置を米側が早々と「特定」する上で決定的に役立った．その反面，連合艦隊側は，雌伏するアメリカ空母群の位置（ハワイから１，７００㎞西北，point luck 地点，それはミッドウェー北東３５０浬〈６４８㎞〉に逼塞）の特定に随分遅れを取った.

日本４空母群対アメリカ３空母群は，当初，互角に戦った．だが，ハワイからＢ－１６が１６機長距離渡洋飛行で飛来すると，ミッドウェーの戦況はいっぺんに米側の優勢に傾いた．なぜなら艦上空機比が日本側に急に不利化したからである．その延長上で，日本海軍３空母が次々炎上した．南雲機動部隊司令官は真珠湾とインド洋海戦での圧倒的成功勝利を携えてミッドウェー海戦に臨んでいたが，その「国民英雄」は輝かしい名誉を一瞬でいきなり失った.

ただし，陸軍兵の移送という特殊「任務」が課されなければ，南雲提督は，神出鬼没に自由に動き回って戦えた筈であった．それが不本意な付加条件のせいで，南雲は米側艦上飛行機の急降下爆撃直下で，例の空母艦隊の触発性爆撃装填から徹甲性雷撃装填，更にやむなくもう一度，爆撃装填へ煩雑に変換し，混乱したのであった.

もう一度整理しよう．相手の see power を壊滅させない侭絶海の小島（ミッドウェー）

を，しかも，相手が待ち構えている海域で，「艦隊」総動員によって占領しようと強引に試みるならば，自方は「分散索敵」を要求され，比するに敵（相手）方は「集中索敵」で済む．「分散索敵」ならば，索敵の性能が格段に劣ってしまうのである．

海戦に不案内な陸軍が，ミッドウェー島ぐらいの小島占領なら占領がイトも容易だろう，と錯覚したのは，「アングロ連合」の変則的規約（上述）体制によってこそ成立していた不安定な暫定的均衡状態を，本来の均衡状態だと錯覚したからだった．上記の索敵方法の差異が彼我に生じさせる有利不利の物理的変化を，陸軍が理解出来なかったからである．

ミッドウェー海戦で襤褸（ボロ）負けを喫した光景（実際には主体部隊位置は５００浬後方に離れていた）を，山本は，「まるで郷里の佐渡島の盥船の転覆を見るようだ」ったと，他人事の様に冷たく評した．「分散索敵」で両手を縛られた怒りが腹中に呑み込まれていたからこそ山本はその言を吐いたのであろう．その一方的惨敗状況の中でも，「飛龍」の山口多聞中将が，瀕死になりながらも「ヨークタウン」を沈めて，一矢を報いた．

4. 珊瑚海海戦の部分優勢から，マリアナ沖海戦の完敗へ激変する戦況

南雲中将は「艦隊派」の総帥である加藤寛治，末次信正，高橋三吉らの直系である．米内－山本－井上トリオが「艦隊派」を一掃排除してから（平沼，阿部，米内内閣），ところが一番重要な真珠湾攻撃を，ミッドウェー海戦も，山本は南雲中将にこそ任せた．

ちなみに，ミッドウェー海戦「後」の南洋海軍作戦に，山本の南雲に対する温情があった，と評する人もいるが，私はそうは思わない．

南雲中将は水雷出身ではあったが，南雲は「ヒット＆ラン」戦法を必ず墨守し，外さない，山本五十六にとって最も信頼できる提督であった．一見華々しく見える，陸軍寄りの上陸強襲策に南雲は決して妥協しない．常に油の残量と，「集中索敵」，「持久戦」兵法で戦う南雲中将しかいない，と山本は考えるのであったろう．なにしろ敵（相手）は，英・米・豪連合海軍であり，帝国海軍には，敵が初めから多過ぎるのであるから，兎に角戦（いくさ）は，なるべく長丁場に引きのばさなければならないのであった．

１９４２年９月段階で，南太平洋戦場に焦点を当てて，その戦局推移を見ると，米海軍側で，稼動できる残存大型空母は「ホーネット」と「ワスプ」のたった２隻だけであった．

前４１年１２月３０日にアーネスト・Ｊ・キング大将が米艦隊司令長官に就任し，その前日の１２月２９日に，ニミッツが米太平洋艦隊司令長官に任じられてから，日数は未だ１年が経過していない．ミッドウェーで喪失した海上戦力を考慮すると日本側にはそれは確かに痛手だったが，しかしそれであっても，太平洋海軍戦争の「汐目」はまだ大きく変わらなかった．アメリカが世界中に奇跡の「ミッドウェー海戦」勝利を大宣伝したことから，戦後日本の日米海戦史も，多くその影響を受けて，帝国海軍はそれから滅びの道をひた走った，ように歴史を描きがちだが，真実は違う．

戻って，他方，例えば先んずる４２年３月１日に，日本軍がジャワ島へ上陸し，３月８日，英領ビルマ首都ラングーンを占領．９日，ジャワ島のオランダ軍が降伏．４月１日，日本軍がニューギニア島へ上陸，１１日，米領フィリピン・バターン半島の占領．

７月，日本兵数千人がポート・モレスビー湾対岸のブナ島へ上陸した．すると翌８月８日，米軍がガダルカナル島（ソロモン諸島南東部）を逆襲占領した．１８日夜に駆逐艦が，

ガダルカナル島の米軍陣地の東方に約９００人の兵員を揚陸したのと共に，帝国海軍は，同島と，隣のツラギ島に駐留する米上陸軍を目掛けて艦砲射撃を加えた．ちなみに，確認される情報によると，当時，同南洋海海域の「連合軍」艦隊総指揮官は，Ｖ・Ａ・Ｃクラチリー英海軍少将である．

戻って，４２年５月７日，すなわちそれは「ミッドウェー海戦」の１月前だったが，「珊瑚海海戦」は，日米史上初の空母同士の水上決戦であった．その次に，４２年６月５日，「ミッドウェー海戦」が戦われたのであった（前述）．

その後，８月８日～９日「第１次ソロモン海戦（ツラギ海峡夜戦）」（米側の呼称は「サボ島海戦」）で，三川軍一中将率いる「第８艦隊」がサボ海峡（米軍の呼称は「鉄底海峡」）を封鎖中の米軍を突破し，米重巡「アストリア」，「ビンセンス」，「クインシー」，「キャンベラ」の４隻を沈めた．ちなみにこの戦いは，日本側の「パーフェクト・ゲーム」だった，と日米双方で称された．

８月２４日，「第２次ソロモン海戦」（米側の呼称は「東ソロモン海戦」）では，近藤信竹中将の「第２艦隊」と，南雲中将が率いる「第３艦隊」が合同攻撃し，米側は３隻の大型空母（「ワスプ」，「エンタープライズ」，「サラトガ」）のうち，「エンタープライズ」，「サラトガ」を損傷させた．

この連戦で，アメリカの大型空母は「ワスプ」，「ホーネット」２隻だけになった．しかも９月１５日，木梨鷹一中佐指揮伊号１９潜部隊が，空母「ワスプ」，戦艦「ノースカロライナ」，駆逐艦「オブライエン」を撃沈した．

「南太平洋海戦」（１０月２６日～２７日，米側の呼称は「サンタクルーズ諸島海戦」）は，南雲機動部隊（「第３艦隊」）では，米が空母「ホーネット」を自沈させ，空母「エンタープライズ」が大破した．

１２月１２日～１４日の「第３次ソロモン海海戦」時には，日本側は３８師団（１万３，５００人）をガダルカナル島へ輸送する作戦に関しては確かに失敗したが，米側も指揮官２少将（ダニエル・カラハン，ノーマン・スコット）が戦死する深刻な損害を出した．

「ミッドウェー海戦」（帝国海軍の惨敗）から５ヶ月後，真珠湾マカラバ丘基地に建設されたニミッツの米太平洋方面艦隊司令本部（ＰＯＡ）では，現在満足に活動できる空母が米側に１隻も残されていない事実を判明させた．この事態こそ，１９４２年年末の「ミッドウェー」後の，山本五十六による，山本流の「帳尻合わせ」の結果だった．

一方，日本帝国海軍が擁する空母は，アメリカ海軍の「零」に比して，大型空母が，「翔鶴」「瑞鶴」「隼鷹」「飛鷹」，軽空母は「鳳翔」「瑞鳳」「龍驤」等であった．その他，高速戦艦，巡洋艦，駆逐艦も無事であった．ただし，帝国海軍の油（海軍燃料）は，せいぜいあと１年ももたなかったのである．

他方，日本帝国陸軍の方は，大陸で力を只管消耗（各地で絶え間無く小競り合いがある）し，あるいは蘭領東インド方面の維持運営にばかり夢中であった．陸軍は珊瑚海，ソロモン海を，まったく一切合切帝国海軍の守備任せにした．南洋海に対する陸軍側の粗雑な考え方は，例えば，塚田攻参謀次長（４０年１１月１５日～４２年２月１８日）が乱暴に次の様に表現している．「（南洋海域に陸軍兵力を派遣するなど，）海に塩を撒くようなものじゃよ」．

翌４３年２月，日本軍は終にガダルカナル島から「転進」（撤退）した（後述）．ちな

みに，ヨーロッパでは，スターリングラードでドイツ軍が降伏した．

６月１５日，アメリカ軍は B－２９の基地として，サイパン島を始めとする，マリアナ諸島を奪回した（それらはいずれもアメリカ側の「集中索敵」を駆使した成果である）．すると，その後マッカーサーは，ソロモン諸島，東部ニューギニアはもう構わないで通過しておこう，と賢明に判断した．つまり，日本陸軍第１８軍，（安達二十三中将指揮）及び第２方面軍（今村均中将指揮）などの強力軍はその脇を，素通りして，「２輪手押し車（陸・海部隊）」を押すように北上する作戦を，マッカーサーとニミッツで決定した．「蛙飛び」である．

B－２９は，航続距離２，０００マイル（３，２１０km），高度３，０００フィート（９，１４４m）以上で飛行が可能である．同機種は，４３年６月に米ボーイング社が開発した．マリアナ群島を得て，アメリカ爆撃隊は，フィリピン，台湾はおろか，日本本土を自由に叩くことが出来るようになった．

４３年時点で，日米の空母製造比は，日３（内訳，改造空母），米１５（内訳，正規空母６，軽空母９）になった．ちなみに４２年～４５年の４年間では，その対比は，日１３隻対米３６隻に変わる．

４３年９月３０日，御前会議の「今後採ルベキ戦争指導大綱」並びに「中南部太平洋方面作戦陸海軍中央協定」は，日本軍の「絶対国防線」を，マリアナ，カロリン，西ニューギニアの線に後退させる事を決めた．それと共に豪北海域を（陸軍にとっても遅まきながら），「防衛主線の一翼」に格上げした．

この後に，帝国海軍は，だが陸軍から陸軍機の借用支援を一貫して受けられなかった．しかし，海軍「戦闘海域」を南洋に「限定」（「集中索敵」が可能になる）出来たのであった．

ところが，日本海軍の最大の弱点は，南西太平洋方面艦隊艦載機はもう約３４０機しか残っていず，基地航空機を含めてもその総数は約６００機に満たない状況であった．この秘密だけは，アメリカ側に絶対漏らしてはならなかった．

しかも，英海軍が当面インド洋専用に浮かべる艦艇は，空母１，特空母２，戦艦４，軽巡１０である．これらの兵力は容易に太平洋へスウィングできるし，しかもイタリアが降伏（４３年９月８日）した後でなら，イギリスは欧州方面から空母４～５，特空母数隻，戦艦２～３，巡洋艦約１０，を太平洋にシフトさせて来ることも可能である．

前４２年１０月１６日，ニミッツは，南太平洋地域海軍司令官にハルゼーを抜擢した．ニミッツは「東ソロモン海戦」で３隻の内２空母を失ったロバート・Ｌ・ゴームレー南太平洋部隊指揮官を非情に更迭し，また「ミッドウェー海戦」大勝利に総指揮官を務めたフランク・Ｊ・フレッチャー中将さえも非情に更迭した．その戦い方が消極的であるという理由を，ニミッツは２人に対して率直に告げた．ジェームズ・フォレスタル海軍次官から報告を受けると，ヘンリー・Ｌ・スティムソン陸軍長官は笑ってみせ，「ジム，彼らの失敗は，戦局面からいえば局部炎症に匹敵するに過ぎないよ」，と誤魔化そうとしたが，勿論ジョークで済む話ではない．

４２年暮れを以って，私が同年を通じて「南洋海海戦シリーズ」勝負の日米勝敗表を作って総点検して見ると，合衆国海軍は，「正規海戦」では帝国海軍による完全敗北を喫したのだった（前述）．

話がここから変わる．それを俄に信じない人もいるかも知れないが，日本大本営は，統合参謀本部を設置していなかった．しかもその上，一方で，４４年８月，「大海令第３３号」は，「連合艦隊本部」が，「捷号作戦」に限定するという条件付きで，「海軍省」と「軍令部」の双方に対して，指揮権上優越させる，と取り決めたのであった．

先んじて日本陸軍は，ボルネオ南東の洋上は，海軍の専管領域であると主張し続けていた．だから４２年中の陸軍は，戦理にいかにも合わない話だが，ガダルカナル島への陸兵の大規模投入を渋ったのであった．海洋戦場における「海主陸従」，一方大陸と内地では「陸主海従」という「持ち場」を，陸軍は頑なに固執し続けた．

「珊瑚海戦」から「ソロモン海戦」迄の連合艦隊は，必死に勝ち続けたが（上述），同海域の事などは，陸軍にとっては，「我関せず」なのであった．

４２年から４３年へを境として，「アングロ連合」内のイギリスの太平洋における指導力が著しく翳り，その反面アメリカは無尽蔵の製造力を駆使して，新型空母，戦艦を量産し，太平洋海域の指揮権でもイギリス海軍のそれを遥かに上回り始めた．

４２年８月７日，「ガダルカナル本格反攻作戦」と共に，アメリカは，ソロモン諸島，東部ニューギニアを入手しようと狙った．まず，ソロモン諸島の西端を狙い，「望楼 watch tower 作戦」と名付ける作戦を開始した．

ミッドウェー海戦圧勝の余勢を駆るアメリカは，アレクサンダー・Ａ・ヴァンデクリフト少将指揮海兵第１師団，フランク・Ｊ・フレッチャー指揮第６１任務部隊を作戦参加させた．米側空母の参加は，「ワスプ」，「サラトガ」，「エンタープライズ」の３，戦艦１，重巡１１，軽巡３，駆逐艦３１であった．基地航空隊２８０機も出動した．

日本軍のガダルカナル島「転進」（撤退）は，４３年２月１日（第１次），２月４日（第２次），２月７日（第３次）に実行され，１４，４００人をともあれ無事に撤退させる事で作戦が成功りに完了した．同撤退作戦に，艦艇２４隻，航空機８９３機を動員したが，日本側が何より痛かったのは，飛行機操作技術に長けた優秀飛行士を２，３６２人，その作戦中に失った事であった．また，航空機８９３機も失った．ちなみに先のミッドウェー戦で，帝国海軍は，既にベテラン・パイロットを３５０人失っていた．このガダルカナル戦で，漸次投入の日本陸軍の戦死者（かなりが餓死者であった）は，陸軍２０，８００人，海軍３，８００人，戦病死者（大半が餓死者）は１１，０００人であった．対比するに，アメリカ側の戦死者は１，５９８人，戦傷者４，７０９人．

４３年８月２８日，古賀峯一ＧＦ長官は，連合艦隊司令本部を，ラバウルからカロリン諸島のトラック島へ撤退させることを決断した．

尚，先に更に時を戻ると，前４２年６月の「ミッドウェー海戦」の後に，山本五十六連合艦隊司令長官は，ＧＦ司令部を瀬戸内海柱島泊地からラバウル（４２年１月に，日本軍がニューギニア東方ニューブリテン島を占領してから，同地に最大の航空基地を建設して保持していた）第１１航空艦隊（草鹿仁一司令官指揮）司令部に移していた．

翌４３年４月１日～１６日，山本五十六長官は「指揮官（大将）先頭」を標榜し，「い号作戦」に打って出ようと決断した．南方方面の空母軍全艦載機（内，第３艦隊〈小沢治三郎司令官指揮〉４空母母艦機１６０機），及び全基地航空隊機（１５５機）という総数５００機以上の「一大航空機編隊」を集結動員させて，ニミッツが次段階に計画している「車輪 cart wheel 作戦」を粉砕し，「ソロモン・ニューギニア空域」を制圧できると山本

五十六長官は判断した.

このタイミングでこそ，山本五十六司令長官は，乾坤一擲の「集中索敵」が用いられる絶好機会であるのだ，と判断したのだったろう．挫折した「Ｍｏ」（米豪連結の要，ポート・モレスビーに楔を打ち込む）作戦，「ＦＳ」（フィジー・サモア占領）作戦を展開する軍事基盤の構築しようとする思いが窺われる．だが，作戦発動２日後に，４３年４月１８日，山本長官は敵機に待ち伏せされて，ソロモン諸島北西部ブーゲンビル島上空で撃墜され，戦死してしまったのである.

すると，島田繁太郎海相は，先任序列を破り豊田副武より１年後輩である古賀峯一を，１ヶ月余の人事考査の空白期（その間律義に山本の喪に服した）の後，４３年５月２１日，やっと後継ＧＦ長官に抜擢した．ただし基地航空機は，サイパン，テニアン，ロタ，グァム等に，５００機程度が残存しているのみである事を弁えておかなければならない（前述）.

４３年１０月，古賀峯一連合艦隊（ＧＦ）司令長官と福留繁ＧＦ参謀長（５月２２日に任）は，山本の遺志を継承しようとして，「ろ」号作戦を発動した.

しかし小沢治三郎「第３艦隊」第１航空戦隊が３空母の艦載機１７０機を出動させたものの，内，１２０機を失った．一方４４年１月，ラバウル基地を喪失し，２月，マリアナ（サイパン，テニアン，グァム）空襲（日本機１２０機喪失），トラック島壊滅（日本機２７０機喪失），３月，パラオ大空襲，と，米軍の各島撃破で叩き潰される状況になってから，それに追い討ちをかけるように，古賀ＧＦ司令長官が４４年３月３１日に殉職死した（撃墜死？による行方不明）.

5. マリアナ沖海戦の空前の大惨敗

「マリアナ沖海戦」（４４年６月１９日～２０日）は，南洋領域での日米海軍戦力比を劇的に最終的に一変させた戦いになった．他方，目を転じると，４４年６月８日，グァム島陥落．６月１５日，サイパン島陥落，米軍がビアク島へ上陸．７月２１日，テニアン島陥落，角田角治（中将）第１航空艦隊（空母を擁せず基地航空機のみ）司令長官の戦死.

サイパン・グァム島の再奪回を図ろうとする「機動部隊」（旧・「第３艦隊」）を率いる小沢治三郎（中将）司令官が考案した「アウト・レンジ戦法」は，なぜ見事に外れにハズレてしまったのか？

同海戦の前に，帝国海軍は，所有空母９隻，艦載機４７３機を有していたが，たった１日の戦いが終ると，空母３隻，そして艦載機２４７機が失われていた．比べるに，米側は空母１５隻，艦載機１，５００機を動員し，きわめて軽微の損傷で帰還し終えたのだった.

だからこそ，米兵は欣喜雀躍の気持ちを押さえ切れず，この戦いを「マリアナ沖の七面鳥撃ち」（The Great Mariana’s Turkey Shoot），だったと勝ち誇って祝賀した.

その結果，双方の，その後の残存戦力は，日本は，空母６隻，艦載機約１００機，そしてアメリカは，空母１５隻，艦載機約１，０００機になっている．一体，何がこの空前絶後の惨澹たる一方的敗北の原因だったのか？

福留繁の後任者として着任する中沢佑（少将）軍令部第１（作戦）部長（４３年６月１５日～４４年１２月１５日に任）は，４４年６月２５日に，伊藤整一軍令部「次長」に対して，「私に第１線（最前線）に職を与えられ，最後の御奉公の機会を与えて下さい」（自

分を最前線に派して死なせて下さい）と泣かんばかりにして訴えた．伊藤「次長」は沈思黙考した後で，暫くしてから徐（おもむろ）に口を開き，「私も同様に考える（私も同じ様にすぐにでも死にたい気だ）．然し，何分の命あるまで現職にあって努力して欲しい」，と中沢に告げた．

この２人の遣り取りの意味が分かるだろうか？２人の話は，帝国海軍惨敗の極秘の原因を間違えること無く示している．２人とも，アメリカ海軍の「マリアナ沖の七面鳥撃ち」の直接原因が，福留繁中将（軍令部第１部長から，４３年５月２３日ＧＦ参謀長に任）への「処分揉み消し」にあると分かり，自分達が犯した浅はかな隠蔽細工で，あまりにも取り返しのつかない過ちを犯したと，あらためて後悔したのである．中沢佑は，４４年１０月，「レイテ沖海戦」直後に，１２月に，台湾高雄の第２１航空戦隊司令官に転出した．

6. 福留査問裁判（極秘）

古賀峯一海軍大将が連合艦隊司令長官に就任したのは，４３年４月２１日だったが，それは「大将先頭」主義の山本五十六前ＧＦ司令長官が撃墜（４３年４月１８日）された状況を受けての急遽の就任だった．なのに，またしても古賀長官も，翌４４年３月３１日に，米機の待ち伏せ攻撃の餌食になったのだろうか？行方知れずになった（前述）．

古賀峯一司令長官は，連合艦隊司令長官への就任に当たって，自分の右腕として福留繁参謀長を引き抜いていた．福留は軍令部第１部長から，宇垣纏に代ってＧＦ参謀長を務める．一言で言えば，福留は将来の連合艦隊司令長官最有力候補だった．

古賀司令長官も，山本五十六の「大将（指揮官）先頭」方式に倣い，しかし戦況の劣勢に鑑みて，連合艦隊「前進」司令部を，トラック島からフィリピン・ダバオへ戻そうと企てた．

その準備に，古賀連合艦隊司令長官は２機の二式大艇を駆って，事前視察にダバオに向け飛び立った．古賀司令長官は第１号機に８名で搭乗した．そして，古賀機の撃墜落事件は，「海軍乙事件」と称される事になった（ちなみに「海軍甲事件」は山本長官墜落死事件を指す）．

この時，第２号機に乗っていた１１名の内に，福留繁（中将）ＧＦ参謀長がいた．福留一行の搭乗機はフィリピンのとある島に不時着し，そこでフィリピンゲリラに捕らまった．この時に福留は，「Ｚ作戦」（「あ」号作戦の母胎である）の書類を，皮鞄に入れて携帯していたのだった．あろうことかその書類がゲリラの手に渡ってしまった．

戦後史が明らかにする所では，この書類は直ちにハワイのニミッツ指揮所（ＰＯＡ）に送られ，情報分析部のシドニー・マシュビア大佐が監修し直ちに英文に翻訳した．その文件はニミッツとオーストラリア・メルボルンの作戦本部にいるマッカーサー（南西太平洋方面軍司令官）の元へ送られた．その後セブ島でカッシング中佐と名乗る人物がゲリラに原本を返却し，ゲリラは又何食わぬ顔で，しおらしく詫びながら福留に返却した．

その「Ｚ作戦書類」には，南西太平洋の島々に配置されている各日本軍の兵力量，所有飛行機，船舶数等が漏れなく記されていた．更に，米軍に対する移動式迎撃作戦に出動する各展開部隊の集中速度という，日本海軍極秘作戦も細かく記されてあったという．

この秘密書類をアメリカが手に入れたら，日米の戦力比がよしんば決戦前に均衡であろ

うと，両軍艦隊の各砲門から火蓋が外されるや確実にアメリカが圧勝しよう．これが，小沢が満を持して練った「アウトレンジ戦法」が敗れ，米軍が「マリアナ沖の七面鳥撃ち」が出来た，秘密のタネ明しであった[3].

「第３艦隊」（実は，「第５艦隊」）を率いるレイモンド・Ａ・スプルーアンス少将は，もとはハルゼー「第５艦隊」キ下の，巡洋艦部隊指揮官上がりだったが，重い皮膚病を患っていて戦場を休み勝ちのハルゼーに代って，特急昇進して大将迄昇格した．

空母１５隻，搭載機９５６機を率いたスプルーアンスは「マリアナ沖海戦」（４４年６月１９日～２０日）に勇躍臨んだ．スプルーアンスは，「帝国海軍側が空母９隻，戦艦６（その名前まで知っている．「榛名」，「金剛」，「山城」，「長門」基幹），巡洋艦（７船隊または４船隊から＋２），攻撃機は約４７０機で応戦して来る」と予め詳細に知っている．

第１船隊（「武蔵」，「大和」）と第５船隊（「羽黒」，「妙高」）が後から合流する事，航空機は南洋海に展開する１２の帝国海軍主要航空基地から集合する陸上機を中心に出動させて来る事と，それを用いる日本の複合的作戦計画の手の内まで，何からなに迄レイモンド・スプルーアンス大将は，事前に知っていた．

福留繁は，自分が運良く命拾いした事実だけを信じ込もうとした．福留が帰国すると，４４年４月１７日，帝国海軍による「査問裁判」（「真相糾明委員会」）が当然の規則通りに開かれた．誰が，福留を一体どのように裁いたか？がまず焦点になる．

その主席裁判長は，①元海軍次官沢本頼雄中将（海兵第３６期）であった．裁判員が，②海軍省次官岡敬純中将，③海軍省人事局長三戸寿少将（海兵第４２期），④軍令部次長塚原二四三中将（３６期），同じく軍令部次長（２人制）伊藤整一中将（３９期），軍令部第１部長中沢佑少将（４３期）ら，全員で６人であった．

ところで，豊田副武（大将）ＧＦ（連合艦隊）司令長官が４４年５月３日に着任した．ということは，４４年４月１日から４４年５月５日迄の戦争が最も激しい時期にもかかわらず，正にそれは実に背筋がゾッとする話になるのであるが，日本海軍中に，軍事作戦の最高責任者である連合艦隊（ＧＦ）司令長官が，４４年４月以降に，名目代理は書類上置いていたかもしれないが，またしても（山本前ＧＦ長官への服喪期間に次いで）１ヶ月以上も，在職していなかった時期があったということになる．この事実を，「帝国海軍史」は今も尚，隠蔽している．

草鹿龍之介少将は，４４年４月６日に軍令部第１部長に任じたばかりであった（５月１日中将昇格）．他に島田繁太郎海相兼軍令部総長が，事後的に「査問裁判」の結果を承認した．

そうなると，同「査問裁判」に関る判決「福留連合艦隊参謀長の無罪」は，「軍令部」の，伊藤軍令部「次長」と，中沢軍令部第１「部長」が実質的に決めたのであろうと，我々は想像できる．福留は，６月１５日に第２航艦長官に返り咲いた．つまり福留は，「レイテ沖海戦」の「空戦」に関って良い，と無罪放免されたのであった．この判決内容が，以後，以下の２項の事情を導いたことに反映している．

（１）「山本連合艦隊司令部人脈」が，「古賀連合艦隊司令部人脈」を咎めだてせず，その後も海軍部内で穏便に事件を隠蔽し続けた．

（2）肝心の今後の「空戦」を，福留が，１０月２４日～２６日「レイテ沖海戦」でも，「Ｚ作戦」漏洩を補うためか？非情作戦を，杜撰に実施決定した．

福留繁自身は，第２次大戦後，１９７１年に東京で８０才の生涯を終えたが，奪われた書類は直ぐ取り戻したから，極秘情報は絶対に米側に漏れ出してはいない（筈だろう），と旧海軍関係者内部で頑なに言い張り続けた．しかし，彼としてはそうするしかなかったであろう．

一方１０月２７日以降，福留第２航艦司令長官は，大西瀧次郎（第１航空艦隊司令長官）と共に，「純忠隊」なる飛行機による非情な特攻攻撃を，帝国海軍史上初めて採用し，以後の日本の海軍航空作戦を，変則的，邪道的「特攻」攻撃中心に切り換えた．

さて，「福留査問裁判」を隠蔽したであろう伊藤整一軍令部「次長」，中沢佑軍令部第１「部長」が作戦指導した４４年１０月「フィリピン沖決戦」では，「連合艦隊」の方がもう，「軍令部」の言いなりにならなくなっていた状況が示唆されている．

連合艦隊司令部は，４４年９月巡洋艦「大淀」から，神奈川県日吉台にある慶応義塾大学予科の寄宿舎内に移った．それからは，彼らは俗に「日吉台」組みと呼ばれる．

４４年７月２２日，小磯内閣が誕生し米内光政が海相に任じ，（１）米内光政海相，（２）井上成美次官（「抗戦」派の岡敬純を廃す），（３）及川古志郎軍令部総長，（４）多田武雄軍務局長，（５）豊田副武ＧＦ司令長官，（６）草鹿龍之介（中将）ＧＦ参謀長の６人が海軍の中心的首脳部体制を構成するし，伊藤整一，及び塚原二四三・両軍令部「次長」，と中沢佑一「部長」が，更にその外郭部を構成した．つまり，新海軍首脳部は，「福留処分回避，その隠蔽」の不当性にはあえて触れず，３ヶ月後に決まった「レイテ沖海戦」に，「伊藤・中沢体制」のままで雪崩れ込んだのであった．

「レイテ」決戦が，急に「ルソン沖作戦」に作戦区域が変更になった ―ミッドウェー作戦の例でもそうだったが ― その理由は，杉山参謀長が，陸軍側の一方的都合を報告し（それが何だったか今でも分からない），海軍側に強談判して，要求を通したのである．

ＧＦ側では，伊藤次長に対する非難が沸騰する．「このまま伊藤は連合艦隊を殲滅させる気か？」．「伊藤，中沢」体制に対する悪感情が，「栗田反転」，及びひいては遂に「菊水」作戦を生み出す事情に繋がっていったかも知れないと私にはいえる．

話をここから飛ばそう．４５年４月４日，及川軍令部総長名で，「菊水１号作戦」が発令された．時に，海相は米内光政，次官は井上成美であった．又，時の軍令部「次長」の名前の方を調べて見ると，何と小沢治三郎である．

運命の皮肉とはこの事であろう．伊藤整一と小沢治三郎の両人が，運命の立場を逆転させ，入れ替って再び向き合っていた．前４３年１０月２４日まで，伊藤中将が軍令部「次長」だったのである．４５年４月５日，第１遊撃部隊に対する「連合艦隊電令作第６１１号」が発令された．「第２艦隊・第１遊撃部隊（すなわち戦艦大和）は単身沖縄に特攻せよ」，とそれは命じた．この電令は，草鹿ＧＦ参謀長が鹿屋基地（鹿児島県）に直接，司令官の承諾を確認しに来た間に，神武徳（大佐）ＧＦ作戦参謀から電話１本で伊藤整一に伝えられて来た．豊田副武（大将）ＧＦ司令長官，小沢治三郎軍令部次長が，直接伊藤に声を掛けることは，遂になかった．異例ともいえるあまりに非情な処遇である．

それまで伊藤整一連合艦隊司令長官は，第５航空艦隊（宇垣纏中将指揮）と共同作戦を

審議していた所だった．同命令は「大和」に，燃料節約という取ってつけたような名分を与えて，米潜水艦が潜伏して待ち構えている事が分かり切っている南西諸島を殊更沿って南下するよう厳命した．燃料は片道分だけを積み込む事が許された．これが「死出の旅」でなくて何であろう？

無駄に海の藻屑となる事が初めから分かっている「意味の無い作戦」へ，連合艦隊司令長官として伊藤中将は，事実上追放された．職業軍人なら軍務上のまさかの死を当然覚悟しているだろうが，「犬死に」を強制されることは屈辱でしかない．果せるかな，誰もの予想に違わず，伊藤中将は，４月７日，沖縄島沖で，超戦艦「大和」と部下と，運命を共にした（同日，伊藤は大将に名誉昇格した）．

7. 「レイテ沖海戦」に仕掛けられた罠

小沢治三郎中将は，来たる「レイテ沖海戦」（４４年１０月２４日）で「囮」艦隊の役目を，豊田副武ＧＦ長官の所から紛れなく命じられたのだったが，それは，空母艦載機が１機も無い，生還が１００％期待されない，戦理上では邪道な「特攻任務」に他ならなかった．「マリアナ沖戦惨敗」の責任を小沢１人に取らせるかの様な非情命令は，豊田副武ＧＦ司令長官，伊藤整一軍令部次長，中沢佑第一部長らが実質上の命令権者であったと見なせるが，その指揮命令系統の周囲に，米内光政海相（７月２２日着任），井上成美次官（８月５日着任），及川古志郎軍令部総長（８月２日着任），多田武雄軍務局長（８月１日着任）もいたということは無視，忘却できない．

「レイテ沖海戦」で，１０月２５日，小沢艦隊は所有空母「瑞鶴」，「瑞鳳」，「千歳」，「千代田」の４隻全部を失ったが，それでも小沢はしたたかに奇跡的に生き残った．ウィリアム・Ｆ・ハルゼー中将の「第５艦隊」を，１日分だけ北方海域に足止めさせる事に，小沢提督は「囮役」として成功を収めた．

草鹿龍之介（４４年５月１日中将昇格，海兵第４１期）ＧＦ参謀長や，神武徳（大佐）が，三上作夫参謀（中佐，３７才）らが，「捷１号作戦」に出撃せよとの最終命令を小沢の所に催促に来たと見えるのだったが，豊田ＧＦ長官は台湾・高雄で風邪にかかっていたそうで，豊田はマニラで寺内元帥南方方面軍司令官と山下奉文大将と１日だけ会って，１０月９日に台湾・新竹に帰着する迄は行方が知れていたのだったが，「レイテ沖海戦」が始まるというのに，それからその地で床に伏せったままで，暫く寝込んでいたそうであった．いつ日吉に辿り着いたのか？なお，「レイテ沖海戦」の直前に，ハルゼー艦隊の艦載機１，３９６機が新竹に集中襲来していた．

尚，軍令部総長は４４年８月２日迄，島田繁太郎（７月２２日に小磯内閣が誕生し，海相は米内光政，次官は井上成美になっている）．８月２日から及川古四郎が任じていた．

ハルゼーは，「真珠湾」，「ミッドウェー」，「ソロモン海」での教訓から，帝国海軍は戦闘冒頭に優勢でも必ず第２撃は避けて逃げたがるのだと読み込んでいた．「日本海軍はとにかく逃げ足が速いよ」，とハルゼーは見縊った発言を憚らなかった．

「レイテ沖海戦」に臨もうとするハルゼー「第５艦隊」の，錚々たる姿を見よう．空母だけを数えても，第１群，「ワスプⅡ」，「ハンコック」，「ホーネットⅡ」，「バンカーヒル」，第２群，「イントレピット」，「インディペンデンス」，「キャボット」，第

３群，「レキシントン」，「エセックス」，「プリンストン」，「ラングレー」，第４群，「フランクリン」，「エンタープライズ」，「サンジャシント」，「ベローウッド」等の空母＋軽空母総勢１８隻を擁していた．その他，護衛空母（輸送船の任務）が１１隻．

ところで，猛牛（bull）ハルゼーは攻撃前に上司ニミッツに，もし戦機が見えたら独自判断で，ハワイ本部の指示を聞かずに戦闘行動に入って良いか？，を尋ね，ニミッツの承諾（「作戦計画８－４４」）を予め得ていた．このエピソードは，ハルゼーのスプルーアンスに対する，滾る底の浅い競争心を存分に暴露する．

ハルゼーは，本来レイテ湾を外郭から防備する任務であったが，空母４隻を擁する小沢「囮」艦隊を主隊であると早とちりしてしまって，何処までも小沢艦隊を追いかけて北上して姿を消してしまった．ハルゼーは獲物を襲う鷹の如く艦橋で勇み立ちながら，自信を部下に誇示した．「我が艦隊は『東京方面』へ向けて現在『退却中』である」，とジョーク交じりの大胆な連絡電をハワイに送った末に，ハルゼーが自ら通信連絡を断った．

ハルゼーは，２０日にタクロバンに上陸したマッカーサー南西太平洋方面軍約３０万人兵員はすっかり脳中から忘却していた．ハルゼー艦隊が去ればマッカーサー上陸軍は物資も武器もない裸状態になっていた．

痛恨の作戦指導ミスを犯して，ニミッツは間もなくそれに気が付いたが，２５日夜は官邸でカクテル付き夕食会の最中だったので，無理にも余裕を見せていた．その席に偶々同席していた米潜水艦隊のチェト・W・ニミッツ Jr. 少佐が，さすがに父親の様子がおかしいと，逸早くこう気が付いた．

「父上，ハルゼー提督はもしかしてサンベルナルディノ海峡の防備という自分の一番大切な任務を忘れて，今，『作戦計画８－４４』を遂行中なのではありませんか？父上，これは父上が犯した，取り返しがつかない危険な作戦ポカ（ミス）ですよ[4].

１０月２８日付の，ニミッツ米太平洋艦隊司令長官の，キング合衆国艦隊司令官宛ての伸展極秘書簡は，こう述べている．ニミッツが心の底に隠蔽した本音である．

「ハルゼーが，帝国海軍の攻撃部隊（小沢機動部隊の空母２，支援の戦艦２を確認）に北方へついつい誘い出されてしまい，サマール近辺を高速戦艦部隊で防備するという自分の一番大切な任務をまさかサボってしまうとは，私は夢にも思わなかったのです．」

ニミッツは，その後公式の場で，ハルゼーを責めないようひたすら努力した．この件が公式記録に残らない様に根回しも謀った．太平洋艦隊司令部戦史班ラルフ・パーカー大佐が，この件を追跡調査して「米国公式戦闘記録」上に残そうとした事が１度あったが，ニミッツはその時には同意署名を拒否した．その後，ニミッツとハルゼーを対象に評伝を，金儲けと名声の為に書きたがるアメリカ人の作家達が現われても，この件を扱う部分では，次の様に必ず史実に修整を加えるのである．

（１）栗田艦隊がたとえ「反転」しなくとも，マッカーサーは事実上，すべての兵員と物資をもう揚陸し終わっていて，レイテ湾に浮かんでいたのは「カラ船」ばかりだった．

（２）「栗田艦隊」はキンケード第７艦隊によって既に十分痛めつけられていたから，戦闘意欲を失って自主的に「反転」逃亡を選んだのだ．栗田艦隊には実戦能力がもう残っていなかった．

そして，この戦闘部分をどうしても叙述しなければならないとすれば，あえて分かり難く，読者が何回読んでも前後関係が理解できない様に，Ｅ・Ｂ・ポッターのようにわざと曖昧にぼかして書くのである．伝記作家にして史家のポッターは，自分がニミッツとその家族に戦後長い年月をかけて無理やり勧めて，ニミッツの伝記を自分主導で執筆し，アナポリス（米海軍兵学校）から出版したという体裁を装った．米国史開闢以来の大提督・国家英雄のニミッツが，自分で自伝を書かない理由は，ニミッツが誰にもまして奥ゆかしい性格だったからだ，と，ポッターは自著の「ニミッツ伝」の前言に殊更釈明を載せている．

8. 運命の「栗田反転」

４４年７月２４日（小磯内閣に米内海相が就任してから２日目）に大本営が「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」を決定し，「捷号作戦」１号～４号の実行が決定された．

４４年，及川古志郎海軍大将の軍令部長就任（８月２日）から２日後にテニアン島が陥落し，８月４日，帝国海軍は最後で最大の作戦決行を決断した．永野修身は先に４４年２月２１日限りで軍令部総長を辞め，後任の島田繁太郎軍令部総長も，８月１日に辞めた．人事がいかにも慌ただしい．

４４年８月１９日，御前会議は，「今後採るべき戦争指導の大綱」を採択した．つまり８月４日，大本営「連合艦隊捷号作戦要領」を承認した．４４年１０月１８日午前１時，栗田第２艦隊は，ボルネオ・リンガ泊地を出撃した．２０日，「連合艦隊電令作第３６３号」は，２５日レイテ島湾口（タクロバン方面）へ「突撃」せよと第２艦隊に命じた．

帝国海軍は１０月２４日～２６日に，最後の「Ｚ旗」を掲げてレイテ沖海戦に臨んだ．だが，その結果は，空母４，戦艦３，駆逐艦１１，潜水艦５，を喪失し，合計３０万６，０００ｔの艦艇を喪失するという，大惨敗になった．比するに，アメリカ軍側の被害は，３万７，０００ｔであり，日本側の１０分の１であった．

ところが，実は同海戦の勝利に関しては，アメリカ海軍もマッカーサーも，出来ればその真相を忘却したいのである．しかもニミッツも，ハルゼーも，マッカーサーと同様，自分が墓に入る迄，真相に口を閉ざす覚悟をしているのである．事後的に検証すれば，ハルゼー艦隊が愚かにも持ち場から離れた瞬間に，互角どころか，「ミッドウェー作戦」の規模を遥かに越える，帝国海軍の逆転勝ちの「時の運」が奇跡的に転がり込みかけた．３０万人の米陸兵は完全殲滅されるか？捕虜になるか？という歴史の真相の瞬間があった．

帝国海軍側の作戦兵力は以下の様であった．

（１）栗田健男中将が率いる「第２艦隊」・第１遊撃部隊（第２艦隊基幹：「栗田艦隊」，超戦艦「大和」を含む，宇垣纏司令官）
（２）志摩清英中将が率いる第２遊撃部隊（第５艦隊基幹：「志摩艦隊」）
（３）西村祥治中将が率いる第１遊撃部隊支隊（「西村艦隊」）
（４）小沢治三郎中将が率いる機動部隊（「小沢艦隊」）

作戦の原案では，（１）～（３）がレイテ湾に集合的に突入する計画になっていたが，

実際は時間差が生まれた．まず，「西村艦隊」が先に飛び込み，次いで「志摩艦隊」が飛び込んで，結果的に両艦隊は共に全滅したが，その偶然生まれた漸次攻撃方式は，湾口を守っていた米軍のキンケイド中将率いるＳＷＡＰＡ連合海軍（マッカーサー系）・米「第７艦隊」（戦艦「ミシシッピー」，「メリーランド」，「ウェストバージニア」，「テネシー」，「カリフォルニア」，「ペンシルベニア」等６，重巡４，軽巡４，駆逐艦２２）を相撃ちで撃沈する事に功を奏し，あまつさえ，狭いサンヴェルナルディノ海峡を封鎖し網を張っていた優秀な第１～第３「タフィー隊」及び護衛空母群（トーマス・スプーグ指揮官だが戦闘用に向かない，戦艦７の内３，重巡１１の内８，軽巡２の内１，駆逐艦１９の内１０，計３９の内２２隻を喪失した）も，同様に相撃ちで壊滅させた．かろうじて生き残ったキンケード「第７艦隊」の残軍は，戦艦の残弾が「０」，巡洋艦・駆逐艦の残存魚雷が僅かに２７本だった，と，米側の記録が残っている．

既に２０日からタクロバン浜に上陸を済まし得意顔でいるマッカーサーの南西太平洋地域軍（マッカーサー系）「１０軍団」と，「２４軍団」（その南約３０ kmのドラッグ島上陸）の総計６万人，及びレイテ湾内に未だ上陸を待ちわびて犇めいていた「第６軍」（クルーガー中将指揮）の残余，それに「第８軍」（アイケルバーガー中将指揮）を含める，総勢約３０万人の米軍将兵の身の上に最大の危機が降りかかりかけていた[5]．

米海艦艇は，形ばかりは護送空母群と称するが，輸送船ばかりの４２０隻が只不用心に湾内に浮かんでいた．その船中に３０万人分の上陸兵士に供給する食糧１万ｔと，補充武器を満載に揚船し，船底倉庫の隙間に上陸をひたすら待機するＧＩが詰め込まれていた．米軍が，レイテを守る日本軍が鈴木宗作中将指揮の第３５軍の，キ下第１６師団（牧野四郎司令官）約４０，０００人だけであると，盗み取った「Ｚ作戦」書類の価値を確信したからこそ，マッカーサーは，彼の慎重な性格からすればそれは希に，珍しく有頂天で油断し切った．マッカーサーはタクロバン市庁舎へ威風堂々勝利の隊伍を率いて進軍し，そこから世界へ向けて，“I'm back by grace of God”と彼一流の大見得を切っている最中だった．かつて２年前，マッカーサーはこれと良く似た台詞をポート・ダーウィン（オーストラリア）へ逃げる直前にも吐いたことを皆が想起した．この２つの言葉は，予定調和を映し，マッカーサー作戦という歴史叙事詩の冒頭と結句の「対句」である．

メルボルンへ逃げ出した南西太平洋方面（陸）軍司令官のマッカーサーと，片や真珠湾のニミッツ（海軍大将）中部太平洋地域総司令官の２人の人間関係がギクシャクしていたからこそ，マッカーサーの身の上に窮地を呼び寄せたのである．

勝利の運命の女神は，一旦ミッドウェー海域で米軍に微笑んだが，気まぐれなようでも公平な戦いの勝利の運命の女神は，今度は日本軍の方に微笑むだろうか？

猛牛ハルゼーと，いつでもハルゼーに忠実に率先従っている，「野球帽」ミッチャー（中将）の高速空母部隊（第５８機動部隊：上掲空母１５＋２隻基幹，戦艦・巡洋艦等７８隻帰属，すなわち艦隊総数は９５隻）は，“Kill japs, kill more japs, kill more and more japs”を絶叫しながら海峡の北の方角へ消えた．栗田艦隊が到着する直前にサンヴェルナルディノ海峡は丸でガラ空きになった．

猛牛（bull）ハルゼーの気持ちは我々が分からないでもない．何しろスプルーアンスは，ハルゼーが皮膚病で臥せっている隙にミッドウェーの手柄を１人占めにしたのだったし，それは良いとしても，名将レイモンド・Ａ・スプルーアンス大将の小憎らしさはそれだけ

ではない．ハルゼーが指揮を執る「第５艦隊」は，スプルーアンス提督がハルゼーに代って座乗する時には「第３艦隊」の名を名乗る．今や「第３艦隊」ばかりが名を馳せて「第５艦隊」の名誉を語る人は少なくなった．ニミッツは，スプルーアンスとハルゼーの「手柄争い」に鎬を削らせている．２人を操った，ニミッツの，元・海軍人事部出身者の手腕が光っている．

小沢治三郎中将は，山本元帥亡き後，先に山口多聞中将も「飛龍」と共にミッドウェーで沈んでしまったから，今，帝国海軍を代表する第２の山本五十六に見なされていた．だからこそハルゼーは，よもや小沢艦隊が「囮」艦隊である筈がない，と第１機動艦隊（「第３艦隊」基幹）が主隊であることを疑うことが出来なかった．

「ミッドウェー作戦」と外観がほぼ同じ様相に作られている「捷１号作戦」は，だが１点だけ重要な点が違っていた．すなわち後者の作戦では，最強の第１機動艦隊が，空母２隻まで擁しながら，「囮」艦隊を務め沈没をハナから覚悟し，他方で影が薄い存在である栗田中将の「第２艦隊」の方が，逆に，主たる作戦部隊の役を担ったのであった．

「捷１号作戦」の発動に関しては，豊田副武・連合艦隊司令長官（４４年５月５日着任）が，１０月１８日１７時３５分の作戦発動時間に日本内地にいない（前述）．

なのに，１０月１８日１７時３５分に，出撃命令だけが何処からともなく，まるで間歇温泉の突然吹き出しにも似て，小沢艦隊に湧いて出現して下されて来たのだった．

栗田艦隊は，リンガ泊地発ブルネイ経由の往路で超戦艦「武蔵」（４３年初にＧＦ旗艦だった）と乗組員１，０２３名（２，３９９名の内）を既に失ったが，シブヤン海を抜けた．すると，栗田艦隊の前に１艦１機の米軍艦艇，米軍機も見えず，難関サンヴェルナルディノ海峡を，栗田艦隊は妨害をまったく受けずに通過した．

ところが，レイテ湾から４５浬，スルアン島が目前の海域に達すると，栗田健男艦長は舵を切らせサマール島東岸を北上するという，所謂「運命の反転」を演じるのであった．そして，栗田艦隊は退却の一路を辿った．この瞬間が，４年間の日米海戦を凝縮する，最後の帝国海軍の，独特な幕引きが示された．燃料が６万５，０００ｋｌ不足して出撃しているから，攻撃が長引いたら帰路がほぼないという客観的事実が確かにあった．そこに２５日朝７時１３分，「機動部隊本隊敵艦上機ノ触接ヲ受ケツツアリ，地点はヘンホチ　１」なる，何処からとも知れぬ奇怪な電報が傍受され，自分はそれをてっきり信じて航路を反転させ，その方角へ見えざる敵を追跡行動をかけたが，その敵は現れなかった，と栗田健男中将は事後釈明した（なおその電令の発信源は，今も確かめられていない）．

１０月２８日，栗田艦隊は出撃時の３９隻から１７隻へ戦力を落としたものの，元の出発地のリンガ泊地へ帰還した．ただし，栗田中将については奇しくも，それはハルゼーと同じだが，予め，「レイテ沖海戦」前に豊田副武ＧＦ長官へ，小柳富次（少将）第２艦隊参謀長を介して，「新敵が現れて戦機を自分が認めたら，従来の作戦をその場で臨機応変に変更しても構わない」，という奇妙な言質を取っている．

「レイテ沖海戦」『後』には，帝国海軍の実動可能な艦載機はほぼ「零」機である．他方陸軍の方は，４４年４月中旬～４５年２月上旬の大陸打通「一号作戦」（真田穣一郎参謀総長）が完了すれば，ヴェトナム港から釜山港まで，陸路で一気通貫に物資輸送が可能になるから別に海軍に頼らなくても良いと信じていて，陸軍機を海軍に貸し出そうという気が丸で生まれなかった．第２航空艦隊（陸上部隊：福留繁司令官）も，特攻機以外所有

機は枯渇していた.

9. 小結 「帝国海軍崩壊の歴史」— 関係者は誰も本当の事を言わない

帝国海軍軍人として生きる者には，砲艦同士の主砲の打ち合いならば職務としてそれを捉えるだろう．しかし，眼下に，ほぼ丸腰状態で敵兵（米兵）が３０万人も突然に現れて，それらを至近距離から艦砲で一斉に吹っ飛ばして，ミナゴロシにしろ，と命じられたならば，仏教徒の良心[6]は少なからずの抵抗感を感じるに違いない.

ここで私はふと，３７年暮れの南京戦での松井石根将軍の行動を思い出すのである．松井は南京攻撃の前に唐生智・南京防衛司令官の求めに応じて直接会談を承諾し（それは結局，唐司令官の突然キャンセルによって実現しなかった），相手に撤退時間を与える為に攻撃開始日を若干延期した．かつその攻撃も，敵方兵の為に脱出用の南京城西門の周囲に兵を配置せず空けておいた．城内突撃も止め，攻撃初日には１中隊の先遣隊入城のみに留めて，翌日，国際安全委員会を伴い部隊を入城させた.

ただし，松井将軍は，己惚れて，当時マスメディアの煽てについ負けて自分が公開「入城式典」を，世界にわざわざ放映させ，中国人に，必要も無い２重の屈辱感をワザワザ与えた事を，自分の一生の不覚だったと気付き，罪悪感を感じ，帰国後，終戦に到る迄懺悔し続けていた.

松井将軍に見る古式戦争作法が，栗田の場合にも通じていたのではなかっただろうか？２人の意識はまるで，１７世紀初の関ケ原の戦を戦った古武士の作法を，彷彿させているのではあるまいか？

帝国海軍は，ロシア，ソ連に代えて，アメリカを新「潜在」敵国に掲げる国防方針の変化を示したが，それはあくまで「潜在」敵国扱いであった．その本音は，海軍は軍事予算獲得競争を陸軍と張り合う必要上から，１種の方便を使ったといえるのであった.

海軍軍人の誰もが，アメリカに本気で命を遣り取りする程の根深い恨みを持っていなかった．対米戦争で主役を，海軍はいやいや割り振られたのであった．その「嫌気」を，栗田は剥き出しにして見せたのである.

４３年中に東條首相肝いりの「国家承認シリーズ」外交が無事終ってしまったから，それ以後は，日本が求める「戦争目的」は当面，他に見当たらなかった．４４年初には，マニラへローマ法王から独立祝電も届いていることでもあったし.

「レイテ沖海戦」後に，栗田中将の「抗命行為」に対する海軍「査問裁判」が，海軍内部の指揮系統の廓清に必ず開廷されなければならなかったのだが，実際にそれが開廷されたのかどうか？さえ，米内光政海相，井上成美次官，多田武雄軍務局長，及川軍令部総長は揃いも揃って皆，完黙したままで戦後に亡くなってしまったから，我々が知る事は難しいのである.

あまつさえ戦後に開催された「海軍反省会」に集った旧海軍軍人の人々の発言も，会の名に彼等がわざわざ「反省会」を名乗っていながら，不思議の極みだが，出席者の誰もが，肝心の「福留無処分」，「栗田反転」，「豊田不在」の内情が少しも言及されていない.

他方，神のご加護で偶々命拾いすることになってしまったマッカーサーは，近代十字軍を名乗る自分達の無敗の誇りを傷つけた「異教徒（仏教徒）」が示した，不可解な「恩情」

なぞに，勿論感謝する気持ちはもとよりなかった事が明らかである．却って，マッカーサーは，「栗田反転」の「謎」の後に，レイテ，沖縄戦という，激烈で圧倒的な局面戦闘を欲した．今次戦争の勝ち負けの白黒をハッキリつける事が今こそ大切だ，とマッカーサーが確信したからであろう．「アングロ連合」代表者としては，決定的一方的に打ち負かされるファシスト日本軍の惨めな姿だけを，アジア・アフリカ植民地の現地住民に見せつけなければならなかったのである．

侵略に失敗した日本軍隊の惨めな末路を目に焼きつけさせて，不遜な，１人前気取りの「国家独立願望」を，アジア・アフリカ人の心中から必ず摘み取ってひたすら絶望させてやろう，とマッカーサーなら考えたであろうから．

注

[1]だからこそ陸軍海費は，歳入の見通しがなくても，公債を当てにして請求額を随意に増やせたのであった．

[2] 日本が「分散索敵」を強いられ，アメリカが「集中索敵」を行った差が戦果に反映した事は歴然であろう．

[3] マリアナ沖でも，日本が「分散索敵」，アメリカが「福留資料」を奪っていたので「集中索敵」になっていた関係は変わらない．

[4] Ｅ・Ｂ・ポッター：提督ニミッツ；フジ出版社，1979，pp. 476.

[5] この辺りの叙述は，米戦史では意図的にぼやかしてある．

[6] 戦場に臨んだ日・米間の「死生観」の違いが垣間見られるのである．

文献

[1] 桑田悦，前原透：日本の戦争・図解とデータ；原書房，1982 年

[2] 風見章：近衛内閣；日本出版協同株式会社，1951 年

[3] 小泉信三：海軍主計大尉小泉信吉；文芸春秋社，1966 年